



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集 INAXライブミュージアム10周年特別展

「つくるガウディ
一塗る、張る、飾る!」を語る

vol. **43** | 季刊 2017 春



つくるガウディ

—塗る、張る、飾る!

を語る



2016年6月に始まった「つくるガウディ」公開制作のプロジェクト。まずはガウディの建築を肌で感じるため、スペインへ。高校3年の時にサグラダ・ファミリアを見て、左官になる決意をされた久住有生さん。ガウディ建築を実際に見るのは初めての日置拓人さんと白石普さん。それぞれに何かをつかんで帰り、以後10か月に及んだプロジェクトは3月31日、完成を迎えました。3人に、今回のプロジェクトを振り返っていただきました。

トーク

日置拓人さん

建築家。「つくるガウディ」展では、建築構造の設計・制作、進行管理を担当。

久住有生さん

左官職人。「つくるガウディ」展の会場には隅々まで、久住さんの美意識が込められている。

白石 普さん

タイル職人。ガウディを読み解き、新しいタイルのデザイン、施工に挑戦した。

進行

水野慶子(「つくるガウディ」展 総合ディレクター)

*2月11日(土・祝)に行ったトークセッションをもとに構成しています。

INAXライブミュージアムは、東日本大震災の復興を支援しています。

01

【特集】

INAXライブミュージアム10周年特別展

「つくるガウディ

—塗る、張る、飾る!」を語る

LIVE SCHEDULE

これからの催し

06

INAXライブミュージアム10周年特別展「つくるガウディ」第2弾「完成! 常滑ガウディ」展

LIVE REPORT

開催報告

07

特別展「つくるガウディ」関連ワークショップ「塗る、張る、飾る」~久住有生・白石普とケーキを作ろう

ぼくとわたしのガウディ

ガウディのハートを作ろう

08

特別展「つくるガウディ」関連講演 北川フラム 特別講演

制作者・久住有生、白石普との特別鼎談

染付古便器の粹—青と白、もてなしの装い

09

特別展「つくるガウディ」関連講演 日置拓人・久住有生・白石普トークセッション

ドキュメンタリー映像『GROUNDSCAPE』 上映会とトークイベント

CONTENTS

INAXライブミュージアム NEWS LETTER

vol.43 季刊 春 2017

表紙写真

世界のタイル博物館1階。モザイクタイルで描かれた桜の前で、中学からの仲良しの二人。「タイルってきれい」「カラフルだね」と、その美しさを感じていただけようです。(2017.2.25)

撮影:加藤弘一

常滑から*

42

南国の風景



北国生まれの私は、青い空と青い海に憧れてしまっ。冬ともなれば厳しい自然との闘いで、風景を愛でることなどつい忘れてしまっからだ。ここ常滑はいわば南国。お隣名古屋では酷暑極寒の日が来よつても、何故かここは別世界で気温も2度くらい違っている。海に面しているからか、濃尾平野を直撃する鈴鹿おろしもここ常滑では勢力を失うようだ。前置きが長くなってしまっが、北国生まれの私のお気に入りには鬼崎ヨットハーバー。中部国際空港から北へ15分程度走って住宅街を抜けると、突然現れる南国。真っ青な空と海、椰子の木立の向こうには優雅なヨットハーバー。随分前に訪れたカリフォルニアの海岸もこんな空の色だったな、とふと思いついてみる。この素敵な海岸の風景、意外と知られていない。宣伝などせずとも人が集まる、仲間うちで楽しむいわば異国。この粋な空間を大切にしたいと願っ。

内沢 礼子

*INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

「シンメトリーじゃないというのも、今回の展示ですごく大事なことです。自然界でかっちりできたものって何もない」と、久住さん。日本の伝統的な茶室の技術で、薄く、柔らかく、日置さんがつくった形をきれいに仕上げていく。



ガウディといえば「破碎タイル」。だが今回、白石さんは破碎タイルを使わずに曲面の多い空間を装飾する方法を選んだ。そのために最初にデザインしたのが、アラビア語で「木の実」を意味する「ルーザ」。久住さんが塗る土に種を埋めるという意味も込めた。

います。実験で安定しているんだからそのままつくれば当然安定するという見解で形が決まっている。すごく現代的な視線を持っているけれど、自然を模倣するような前近代的なところもある。ガウディというのは非常に魅力的で、知れば知るほど謎の部分も多いです。

「すごい！楽しいな」と思いながら

水野 共同制作はいかがでしたか。
久住 僕は、白石さんの張ったタイルが一番きれいに見えるように壁を塗りました。
水野 そうおっしゃっていますが(笑)、



写真1

自然の混沌から着想を得る

水野 今回は、コロニア・グエル教会の未完部分をつくるというのがテーマ。しかも制作の過程を見てもうというものでした。
日置 スペインのサグラダ・ファミリアは、大勢の観光客がいる中で工事が進んでいました。そのザワザワ感に心がかきたてられた。我々のプロジェクトも、現場の臨場感を肌で感じてもらえたら面白いと思います。サグラダ・ファミリアより前につくられたのが、コロニア・グエル教会です。

ガウディはその形を決めるために、10年の間「逆さ吊り実験」をしました(写真2)。そして、できた形を写真に撮り、それを逆さまにして完成予想図を描いていった。理論的に建築を考えるんじゃなくて、視覚的に物を把握して、それを平面にしていたんです。僕は今回、ガウディと同じように、この写真から形をつくりました。3Dコンピュータを利用してロープを吊り下げた形をつくり、実際の形を決めていきました。
水野 その形はシンメトリーじゃありませんね。
日置 教会は神様のための家なので普通はシンメトリーですが、ガウディは違う。理路整然じゃなくて、自然の混沌としたものから着想を得て

写真2

ガウディが行った逆さ吊り実験のコロニア・グエル教会の模型。縮尺は10分の1。両端を固定して垂らしたひもに砂の入った重りを付け、できたカーブをアーチの形とし、それを何個も組み合わせてアーチ構造をつくる。一つの砂の重さを変えると全部の形が変わる。それを10年間、何百回と繰り返して、この形ができた。

© Catedra Gaudi



水野慶子 白石 普さん 久住有生さん 日置拓人さん

白石さんは？

白石 やっているうちに、その方向になってきたのかな。

久住 最初は正直、自由自在なのは僕ら左官の方が得意で、僕らが形を作ってそこに白石さんにタイルを張ってもらった方がうまくいくだろうと思ってたんです。それが、もう、白石さんは張り出すとどんどんすごいことをやる。「これ違う。反対だったな」と思って(笑)。

白石 この写真(写真1)は僕の一番のお気に入りの天井です。7個と3個という素数で、「タイルを割らずにタイルを割り付ける」みたいな。平面では8個で割りつけられるはずですが、きつい曲面なので、偶然にも7個で割れた。「すごい！楽しいな」と思いながら張っていました。

水野 お客様には、「これはどうやって施工したんですか、すごいですね」という感想をもらいました。

白石 ガウディ建築では、カサ・バ

昔からの左官仕事を見せる

久住 仕事としては、下地は僕らがつくって、白石さんがタイルを張った後に僕らが仕上げる。毎回来ると、白石さんが先に張ってくれていま



トリョの瓦が面白いと思いました。瓦を重ねる幅によって曲面を回すことができる。それで、手びねりで作ったタイルがこれです(写真3)。張っていて、破碎タイルの張り方とすごく似ていると思いました。2手くらい先を読んで張るんです。次の次にこれを張るために、今これをこっちは向きに張っておいて...と。それが楽しくてやめられなくなると、久住さんに「張り過ぎだ」って怒られました(笑)。

す。全然予想もしない張り方だったり、量だったり。絶対俺のこと考えないやろな、という(笑)。でも、すごく魅力的で、タイルがこんなに

自由自在に張れるなんて面白い。僕がその後から収めていった方が、今回はうまくいくだろうと思いましたが、

今朝、現場に来て、白石さんが張ったのを見て、半日考えて、これだったらこのタイルはきれいに見えるだろうなとか、もう少し表情荒くした方がいいかなとか、本当に些細なことなんです、そういうのを考えながらつくっていく。もともと左官って、全体の建物をきれいに収めていくことが多い仕事です。今回は、昔からやっている仕事をうまくやらせてもらったという感じです。

水野 お二人とも会場に入ると自由自在に張れるなんて面白い。僕がその後から収めていった方が、今回はうまくいくだろうと思いましたが、今朝、現場に来て、白石さんが張ったのを見て、半日考えて、これだったらこのタイルはきれいに見えるだろうなとか、もう少し表情荒くした方がいいかなとか、本当に些細なことなんです、そういうのを考えながらつくっていく。もともと左官って、全体の建物をきれいに収めていくことが多い仕事です。今回は、昔からやっている仕事をうまくやらせてもらったという感じです。



写真3

主たるタイルは緑から青をメインにした、日本のやきものきれいな色。土壁も意識した。これは、久住さんが「アマーネ」と名付けたタイル。不規則に張るとこうなる。

時間くらい、何もしゃべらずとにかく見ていた姿が印象に残っています。

久住 現場に来て、お互い相手のつくったものを見て、相手のつくったことを感じて…。ちょっと気持ち悪いですけど(笑)。

つくりながら、考えながら、つくる

久住 ガウディの建築には、より良いものをつくるために、話し合いながら、考えながらつくっている感じが自由に出ていて、それを見るだけで感動します。日本の建築もこういうふううに、職人がつくりながら考え

日置 彼らは独自の空間認識が高いから、お互いに調整しあって空間をつくり上げることができる。こういう職人は、実はほとんどいないです。本当は空間認識の高い職人がもっと必要です。それは、図面で表す以上の表現ができるからです。

ていくところが増えてくると、もう少し面白くなるのになあとか、いろいろ感じました。

白石 例えば建具と壁の収まりなどを見ると、職人同士がかなり話し合っているのだろうと思いました。破

クライマックスは入口のドームの外壁。久住さんが土壁を塗る。その上に、白石さんが定期的にタイルを張っていく。「久住さんに下地を塗ってもらうなんて光栄です」と笑わせる白石さん。「久住さんの土壁は、厚みも柔らかさもタイルを張るのにちょうどいい」とも。



か、そういう話をずっとしてね。その時間は貴重だったと思います。

つって長く使われるから、そうやってつくるのがいいんやけど。今の日本は、剥がれてきたの見て「これカッコいいな」って考える時間がないからね(笑)。今回のプロジェクトもまた、手間ひまかけて、想いを込めて、つくりました。

空間全体を楽しんでほしい

水野 プロジェクトを終えて、来館者に見ていただきたいところは？

日置 僕は1年以上、施工の時には久住君も大所帯で、住み込んでつくっていた。作業が終わると夕飯を食べながら、今日はこうだったとか、明日は雨が降るからどうしようとか

絵具を使って日本らしい赤や黄色を出した絵付タイル。張り方もいろいろ、少しだけ割ったタイルが使ってたったりと、ユーモアもあって見えて飽きない。そして、そのタイルが浮き出るような土壁の色。

日置 重厚というより軽やかな、我々の考えた現代的なコロンニア・グエルができたと思います。ドームでは、薄いシェル構造が見どころです。そこに、日本の伝統的な左官技術と、新しい日本のタイルが表現されています。ドームの中を歩いていくと、まるで絵本をめくっていくように、楽しい空間が展開されるはず。す。

久住 日本の技術と美意識——そして、それだけじゃない要素も盛り込んでいます。土の色、形のつくり方、表情の出し方、「きれいだね」「気持ちいいね」といった、空間全体の雰囲気を感じてもらえたらと思います。

白石 どこから見ても、同じ景色は一つもありません。見る角度で左官壁やタイルの織りなす色と表情が変わる。それを楽しんでいただきたいですね。

水野 ありがとうございます。

◎完成写真は次のページ。



実はこの共同制作のために、タイルは、真ん中の穴から土壁が見えるようにデザインされていた。久住さんの土壁は、「下地」でもあり、同時に「仕上げ」でもあった。タイルを張った後は、ほんの少し手を入れてだけ。その表情は、混ぜ込んだ薬がかすかに浮き出て、ふんわりと柔らかい。2人の職人の技と美意識が、新しい表現を生み出した時。